句集

虫合せ

原田達夫

虫合せしてゐる中にゐるやうな

ものに凝る性格が若い頃から備わり、

それが俳句にもよく作用している。

この好奇心、行動力こそ著者の

源泉であろう。

——伊藤白潮

（序文より）

花芒大大と峯並びけり

斑鳩の柿の色せり迦楼羅面

抑へる手招く手押す手風の盆

東大寺展声明高し雪催

鸚哥きて花に狼籍龍子の居

癇癪を出しそびれゐる梅雨の象

嬰攫ふ翁の喜色雪しまき

寒立馬薄日さす野を食み止まず

水たまり掃き出してゐる酉の市

ぼろ市や銅壺ぶらさげゆく女

亀鳴けり伴天連追放令の染み

虫仲間逝く

破れ帽子かぶり花野を共に駈け

額打つ飛礫は碧き金亀子

冬の蜂キルトの花の上を這ふ

冬の蝶日を背に思ふこと多し

蜘蛛の巣を白く飾れり山の雨

かまどうま蕎麦雑炊をもてなされ

あめんぼう西も東もなくて跳ぶ

忍者飛び蝿虎をしかと手に

蜻蛉生れ気づけば腕の力瘤

地雷掘るやう蟻地獄曝しけり

嘴先の蜥蜴打ち据ゑられてをり

泣き虫も借り物になる運動会

放屁虫愛づる姫などをらぬはず

男根に陰あり八月十五日

狼になりたき一夜ありにけり

着ぶくれて瞠るピカソのまぐはひ図

春服や熊襲の眉を切り揃ふ

自画像の鼻それぞれや楸邨忌

初富士や補聴器風に鳴つてをり

待春や父に似てきし甲の皺

ぼうたん崩れ不整脈収まらず

虫合せしてゐる中にゐるやうな

大辛夷一村の空明けやらず

半球の野の陽炎を男来る

さしば舞ひ遠つ淡海は天の色

北辺の鳶たはたはと夏河口

地震長きかな半丁の新豆腐

郭公を駅舎の中に聞いてをり

学童疎開の恵林寺にて

桑の実や腹を空かせし少年期

白息をより白くする百歩ほど

サンクチュアリ無視されてをり鷹一羽

初窯市大きな手から釣り貰ふ

裸木になりし銀杏の逞しき

出稼ぎの長老なりし初太鼓

年惜しむ象の足踏み頻りなり

幇間の目のただならず年を祝ぐ

早暁や大河は昏く去年のまま

去年今年伝言板のアラブ文字

霜晴や七つならびぬ石鳥居

古稀はただ数だけのこと花柊

吉良の首洗ひし井戸に青木の実

曾祖母は乳人子なりし冬桜

句集　虫合せ（むしあは）

2005 年 5 月 31 日　第 1 刷発行
著　者　原　田　達　夫
発行者　大　崎　紀　夫
発行所　株式会社　ウエップ

pdf ファイル　　俳誌の salon